

社会に感動を与える人々を応援します

CITIZEN OF THE YEAR 2019



ANNIVERSARY



「尻別川の未来を考える オビラメの会」によせて

オビラメを通して、大自然の循環にまで意識を高めて、
素朴に、シンプルに活動が続けてこられたことが素晴らしいと思います。

武田 双雲

01 | CITIZEN OF THE YEAR 2019



環境保護

イトウを絶滅から救おうと
30年計画で保護に挑む

尻別川の未来を考える オビラメの会

／しりべつがわのみらいをかんがえる おびらめのかい 事務局:北海道虻田郡ニセコ町



人々に感動を与え、
社会に希望の光を灯す活動に
私たちはこれからもエールを送り続けます。



シチズン時計株式会社
代表取締役社長
佐藤 敏彦

シチズン・オブ・ザ・イヤーは「社会の発展や幸せ、魅力づくりに貢献し、社会に感動を与えた良き市民」を顕彰するためにスタートしました。今回で30回を迎え、今年も、本当に素晴らしい方々を表彰させていただくことができました。

当社は、重点施策の一つとして「サステナブル経営」を掲げています。受賞者の皆様の活動が周囲に影響を与え、より良い社会の実現に繋がっているように、当社も事業を通じて、SDGsの達成を含む様々な社会課題の解決に取り組み、持続可能な社会づくりに貢献できるよう、精一杯努めてまいります。

シチズングループは、これからも「市民に愛され市民に貢献する」という企業理念のもと、市民の皆様の良き活動を応援してまいります。

Contents



3 尻別川の未来を考える
オビラメの会

イトウを絶滅から救おうと
30年計画で保護に挑む



7 矢田 明子さん

地域の中で人々を支える
コミュニティナースを实践



11 スタートラインTokyo

走る喜びを伝えたいと
義足で走る練習会を30年



15 2019年度
シチズン・オブ・ザ・イヤー表彰式

メッセージ

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長
山根 基世さん

18 歴代受賞者一覧

シチズン・オブ・ザ・イヤー
とは

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰しています。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙の中から、賞にふさわしい記事を選び、主要新聞の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

2019年度 選考委員会

- 委員長
山根 基世 元NHKアナウンス室長
- 委員
香山 リカ 精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授
木戸 哲 毎日新聞社 社会部長
高野 真純 日本経済新聞社 編集局次長 兼 社会部長
田中 光 朝日新聞社 社会部長
恒次 徹 読売新聞社 社会部長
中村 将 産経新聞社 編集局次長 兼 社会部長
益子 直美 スポーツコメンテーター

敬称略・五十音順 ※肩書は、2020年1月現在

各受賞者へ贈る書



書道家
武田双雲

1975年熊本生まれ。東京理科大学卒業後、NTTに就職。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」など、数々の題字を手掛ける。講演活動やメディア出演、著書出版も多数。海外でも書道ワークショップや個展、講演を行うなど、世界各国で活躍する。

尻別川の未来を考える オビラメの会

尻別川に 再び命の賑わいを！ イトウを愛し守り続ける

「だいたい色の卵を実際に目の当たりにして、感無量でした！」
地元の釣り人から、産卵間近の雌イトウを釣り上げ、お腹から卵がポロポロ漏れ始めているという連絡を受け、オビラメの会の会員は直ちに現場に急行。1mを超える巨体を3人がかりで抱きかかえ、細心の注意を払い6100粒の卵を採取し、人工授精に成功しました。会の結成から7年、待望の瞬間でした。



巨体で知られる尻別イトウは人工採卵も3人がかり

尻別イトウ絶滅の危機に 立ち上がる釣り人たち

数ある北海道の水系の中でも、とりわけ巨体を誇る尻別川のイトウは、アイヌ語に由来して「オビラメ」とも呼ばれ、特別な魚として多くの釣り人を魅了してきました。

「イトウが尻別川からいなくなっている！」。いち早く異変に気付いたのは、尻別川とイトウを見つけてきた釣り人たちでした。1980～90年代の河川改修工事などによる環境の変化で、イトウは生息場所を失い急激に減少していったのです。危機感を強くした地元の釣り人たちは、1996年、イトウ釣りの名人で「レジェンド」といわれる故・草島清作さんを中心に、「尻別川の未来を考えるオビラメの会」を結成しました。



2015年に新設したニセコ町のイトウ飼育施設「有島ボンド」での採卵作業
(撮影：小山内涼音氏)

設立前年の1995年から2001年にかけては、北海道立水産ふ化場の研究職員である川村洋司さん(現・オビラメの会事務局長)の協力を得ながら、イトウの生息状況を調査。繁殖期に合わせ、尻別川の50カ所以上で自然繁

殖の痕跡などを調べましたが、見つかったのは10cmあまりの幼魚が1尾のみ。絶滅の危機に瀕していることがわかったのです。

このため、生息環境の保護によるイトウの復活を断念。人工ふ化させて稚魚を放流し、もともと生息していた場所に再び定着させる「再導入」を目指すしかないと判断に至りました。ここで重要なのが、会の皆さんが復活を目指したのは、単なるイトウではなく「尻別川のイトウ」だということでした。放流するのは、尻別川で捕獲した野生のイトウから採卵・授精して人工ふ化させた、「尻別川固有の遺伝子を持つイトウの稚魚」なのです。



人工ふ化を成し遂げ 尻別イトウの稚魚を放流

倶知安町の飼育池で約5800粒が採れた2010年の採卵会。雌イトウを抱きかかえるのは現事務局長の川村さん

右・婚姻色で真っ赤に変身した尻別川の雄イトウ。推定体長1.2m(撮影・足立聡氏)
左・人工授精によるふ化率は5%程度と低く、大切に育てられる(撮影・鈴木芳房氏)

またイトウの成熟には4、5年から10年近くかかり、世代交代に長期間要するため、再導入に挑むにあたり、「オビラメ復活30年計画」を2000年に策定。10年ごとの3つのステージに分け、第1ステージは稚魚の生産と再導入場所の選定、第2ステージは再導入

によるイトウ繁殖拠点の再生、第3ステージは拠点を全流域に広げること目標としました。

魚道の設置が進展し 24時間見守りもスタート

30年計画に先立つ1998年、

オビラメの会は、人工ふ化放流による「尻別イトウ」の再導入に向け、捕獲した野生イトウの飼育を倶知安町の飼育池でスタート。2001年には、人工ふ化させた稚魚の放流場所を探すため、尻別川の支流を一本ずつチェックする「尻別川総点検」を開始させました。

しかし、最初の難関である、尻別イトウによる採卵・授精はなかなか実現せず数年が経過しました。イトウの産卵期である春を5シーズン見送った2003年5月、ついにその時がやってきました。地元の釣り人から会に連絡が入り、産卵直前とみられる超大型の雌イ



繁殖期で婚姻色になり、横並びで威勢を競い合う雄イトウたち(撮影・坂田潤一氏)

戻れる日を賑わいが 戻れる日を目指して



イトウを静かに見守るよう呼び掛ける告知板。繁殖期には24時間体制の見守り活動が続きます。

トウを釣り上げ、自宅の水槽でお腹から卵が漏れ始めているというのです。会のメンバーはすぐに現場に駆けつけ3人がかりで採卵。飼育池の雄イトウの精子を使い悲願の人工授精に成功したのです。その後、この雌イトウは飼育池に移されて翌年も抱卵し、オビラメの会は2年連続で人工授精に成功。その年の9月、尻別川支流の倶利伽羅川で、ヒレの一部を切除して標識にした稚魚の放流を達成したのです。会発足以来待ち望んだその日の想いを、当時の草島会長は「生涯忘れることのできない日。箱入り娘を嫁に出す親の気持ちをはかくありなん」と会報に寄せています。

さらにオビラメの会では、成長した稚魚たちが放流された川に回帰できるよう、川に数カ所ある落差工(ミニサイズのダム)に魚が通れる「魚道」を設置してもらったため、行政への働きかけにも注力しました。その結果、自治体や地域住民など多くの協力を得て、倶利伽羅川の落差工すべてに魚道が設けられたのです。

2010年、別の支流で約20年ぶりに天然の尻別イトウによる自然産卵が確認されると、繁殖期のイトウ保護のため、翌年から24時間体制の「見まもり隊」活動をスタート。毎年4月中旬からの約1カ月間、河川敷に設置したプレハブ小屋「オビラメハウス」に交替で泊まり込み釣り人にイトウ釣りの自粛をお願いするなど活動を続けています。



小学校での出前授業を通じ、イトウを放流する目的や環境を守る大切さを伝えている

第2世代を確認 全流域での再導入へ

2012年、見まもり隊活動中のメンバーからうれしいニュースが飛び込んできました。04年と05年に放流した人口ふ化の稚魚が、親魚となつて倶利伽羅川に回帰し、産卵行動をしているのを確認したというのです。朗報は一斉に伝えられ、会のメンバーは喜びに包まれました。絶滅危惧種であるイトウの再導入は、世界でも例がない快挙でした。

そして2019年ついに、放流魚の自然繁殖によつて生まれた第2世代の尻別イトウたちが成長して戻り、自然繁殖に参加しているのが初確認されたのです。それは、メンバーが「言葉には言い表せない」という感動の瞬間でした。

「オビラメ復活30年計画」の始動から20年。9回にわたり合計約7800匹の稚魚を放流し、人の手を離れての自然繁殖も成し遂げ、「少しずつ成果が出て自信が持てた」と話す吉岡現会長と川村事務局長。活動の啓発のため、地元小学校で尻別イトウの生態を教える出前授業や地域での説明会などにも



2007年には子どもたちも参加して約1,000匹の稚魚を放流(撮影・鈴木芳房氏)



放流を待つ稚魚たち。これまで計約7,800匹が放流された(撮影・玉井秀樹氏)

「イトウのおかげで良いことが増えたと流域の人たちに言ってもらえるようになった。別の流域で再導入を図る際にも歓迎してもらえ、活動はもっとうまくいくと思います。そうして協力してくれる方々を増やしていくのが自分たちの役割・使命だと思つて、これからも努力していきます」と今後を見据えます。30年計画の残り10年、イトウから「もう、手を貸してくれなくても大丈夫」と言われ、尻別川に多様な生き物の賑わいを取り戻して最終ミッションの「解散」を果たすまで、オビラメの会の挑戦は続きます。



双雲

矢田明子さんによせて

人は孤独に耐えられない生き物だと思います。矢田さんがみんなの孤独に真摯に向き合い、心を紡ぎ続けてきたことに敬意を表します。

武田 双雲



地域の中で人々を支える コミュニティナースを実践

矢田 明子さん / やた あきこ 1980(昭和55)年生まれ。島根県在住

02 | CITIZEN OF THE YEAR 2019



幅広い世代の健康や元気を支援している矢田さん。「私も相手の方から元気をもらっています」と話します



矢田 明子 さん 人とのつながりの中で まちを元気に！健康に！

「お父さん…、私、看護師さんになるけんね…」
最愛の父が末期がんで入院したとき、矢田明子さんは、確かな経験と知識をもつ看護師たちが、症状の些細な変化も見逃さず的確に予測を立ててアドバイスし、父を安心させているのを目の当たりにしました。その様子に、「病気になる前からこんなふうにできれば、人々の役に立てるかもしれない」と強く感じ、余命わずかの父に看護師になることを誓ったのです。

父の死をきっかけに
子育てしながら
看護の道へ



幼き日、地元の祭りで父と一緒に踊った思い出の一枚

病院の中ではなく、暮らしのそばで気軽に健康相談ができたり、日常的に人々とつながって、まちを元気にするおせっかい、焼きの看護師。そんな「コミュニティナース」を10年以上前から実践し、その普及と人材育成にも奮闘しているのが、鳥根県出雲市出身の矢田明子さんです。

矢田さんが看護師を志したのは、3人の子育てをしていた26歳のとき。最愛の父が末期がんで入院し、わずか数カ月のうちに帰らぬ人となったことがきっかけでした。入院中、父が最期まで信頼していたのが、症状の変化から先を予測し、関わりで父を安心させてくれた看護師たち。自分もそういうことができれば、人々が病気になる前から役に立てるのではない

きました。

そんな活動の中では、亡き父と同世代の人との出会いがありました。「コミュニティナースの活動を熱心に応援してくださる方がいて、あるときその理由を尋ねると、幼くして亡くなった息子さんを私に重ねていたという事で、『応援せずにおれなかった』と涙を浮かべておっしゃってくれました。そうした

出会いから、私たち自身も元気をもらっているんです」と矢田さんは想いを込めます。

2016年に訪問看護やコミュニティナースを展開する会社「株式会社コミュニティケア」をスタートさせたところには、活動を見学したり話を聞くため全国から年間150人以上が訪れるようになりました。

始めてみると、病院の外でも使える知識が多く「コミュニティナースはどこでもできる」ことを実感。子育て中の主婦を対象に、出雲市内のカフェで開催したイベントでは、回を重ねるうちにがん検診を受けて早期発見につながる主婦がいるなど、健康に対する意識の変化を促すことにも手応えを感じることができました。

社会のニーズを実感し 人材育成もスタート

2011年、3年生のとき、矢田さんは出雲市に隣接する雲南市が主催する次世代育成事業「幸雲南塾」に参加。地域のコミュニティづくりプランで高い評価を得るとともに、「もっと自分の視野を広げたい」と思うようになりました。

そうして翌年に看護師免許を取得し、鳥根大学医学部看護学科へ編入。看護学以外にも社会学や文化人類学など幅広い分野を学び、経済や人の行動などへ理解を深めました。これが、さまざまな職業や年代の人と触れ合う機会を増やし、まちの皆さんへの理解が深まり、暮らしのそばで寄り

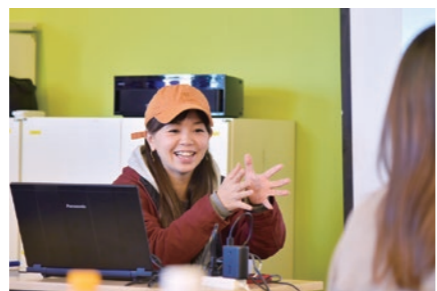
かと思っただけです。

それからは、3人の子育てをしながら猛勉強を重ね、2009年、鳥根県立大学短期大学部看護学科(当時)に合格。そこで入学早々に出会ったのが、「コミュニティナース」という考え方でした。それは、人々の暮らしに溶け込み支援していくというもので、がんが進行してから見つかった父の無念を思う矢田さんに強く響くものでした。

調べてみると、そうした活動は当時の日本ではほとんど見られず、「それなら、私がやってみよう」と、仲間5人でグループを結成。まだ看護師資格がないため、「コミュニティナース 見習い中」の名刺をつくり活動を始めたのです。看護を学びながらまちの中で活動を



看護学科に入学早々、仲間5人とグループを組み活動を開始



コミュニティナースの研修などで全国を飛び回る矢田さん



高齢化が進む地域では特に大切な役割に(鳥根県雲南市での活動)

添うヒントになったのです。

2014年には、雲南市との協賛の末、「幸雲南塾」の活動を支援する「NPO法人おつちラボ」を設立し、人材育成や組織づくりを経験。その後、保健師の免許を取得し大学を卒業すると、コミュニティナースの活動を本格化してい

健康なときから出会える 「まちのナース」を目指し



2016年からは人材育成のための講座「コミュニティナースプロジェクト」を東京でスタート

「こんなにもニーズがあったんだ。少しでも多くの活動を広めることで、皆の役に立てたら嬉しいな」と感じた矢田さんは、仲間を育てようと「コミュニティナースプロジェクト」の第1期を東京で開催。参加した12名の看護師の中には、目を

輝かせながら「僕がやりたかったのはこれなんです！」と話す男性看護師もおり、うれしさと同時に、あの日「看護師になる」と父に誓ったことが、こんな形で誰かの「やりたかったこと」につながったことへ感慨深いものがありました。

コミュニティナースがあたり前の社会へ

全国の仲間とともに
もつと元気な日本に！

育成講座には毎回全国各地から多彩な受講生が集まってきました。動機もさまざま。2017年には、コミュニティナースの育成や普及支援を加速させるため「コミュニティナースカンパニー」を設立。コミュニティナースプロジェクトの運営も、この会社で行うようになりました。

育成講座には毎回全国各地から多彩な受講生が集まってきました。動機もさまざま。2017年には、コミュニティナースの育成や普及支援を加速させるため「コミュニティナースカンパニー」を設立。コミュニティナースプロジェクトの運営も、この会社で行うようになりました。

2020年までに実施された講座の修了生は200人を超え、地域の公民館や駅、商店、ガソリンスタンド、カフェ、食堂など、さまざまな場で活動しています。

また、新型コロナウイルス感染症の影響で誰とも会わない高齢者が増えたことや、対面手段のオンライン化などの状況が生まれている現状にも対応。「お孫さんとの写真交換やビデオ通話をやってみませんか」など、その人がやってみてほしいと思う心のスイッチを押しながら、スマートフォン利用のハードルを下げ、遠くに住む子や孫とのコミュニケーションをとるきっかけづくり

や、遠くにいる家族に代わって一人暮らしの高齢者をコミュニティナースが訪ねる活動なども始め、「こうした支援はこれからもっと必要になります」と話します。

多くの皆さんの応援に感謝しながら、全国で頑張る仲間とともに、コミュニティナースの活動を支える知恵や収益の仕組みも築いていきたいという矢田さん。「おかげさまで、協働していただく自治体さんや企業さんも増えてきました。日本は本当にいい人たちがいるなと感動しています。これからも、コミュニティナースがあたり前になる元氣な日本を目指したいです」と、熱く語ります。



暮らしのそばで人々に寄り添うコミュニティナース。男性も活躍中だ



新型コロナウイルスの影響で暗い曇田気になりがちなときも、炉端焼きのしゃもじを使って距離を取りながらお茶を振る舞うユーモアなどで皆さんを笑顔に



「スタートラインTokyo」によせて

「風を切る喜びを感じてほしい」この思いひとつでここまでやりきること、とてもかっこいいと思い、心地よく爽快感のある「風」を筆で表現しました。

武田双雲

03 | CITIZEN OF THE YEAR 2019



社会貢献

走る喜びを伝えたいと 義足で走る練習会を30年

スタートラインTokyo / すたーとらいんとうきょう 活動地:東京都荒川区他





義足ユーザーの足の状態は一人一人異なり、それぞれに合わせて入念に調整される



軽くて丈夫なカーボンファイバー製のスポーツ用義足。練習会では貸し出しも行っている

スタートラインTokyo

自分で風を切る喜びを 体いっぱい感じてほしい!

「これまで走った記憶がなく、初めての“走る”という体験に感動した!」
4歳から義足で生活してきた20代の女性は、義肢装具士の白井二美男さんが試作した日本初のスポーツ用義足を履いて力強く一歩を踏み出し、見事に小走りすることができました。この勇気ある一歩が、義足の人たちに走る喜びを伝える「スタートラインTokyo」の誕生につながったのです。



月1回の練習会に加え、近年はもっと走りたいため週1回の練習会も開催

るとすぐに、スポーツ用義足の開発をしたいと会社を説得。何とか協力を得ることができ、試行錯誤を重ねて研究開発に打ち込みました。2カ月後には試作第一号を完成。早速、当時白井さんが義足を担当していた20代の女性の協力を得て、スポーツ用義足での試走に見事に成功したのです。そのときの「感動した」という女性の言葉と目に溢れた涙を見て、「走ることがこんなにも喜びと自信をもたらすのだ」と実感したそうです。

その後、何名かにスポーツ用義足を試してもらい、義足ユーザーの誰もがあきらめていた「走る」という動作が、専用義足と練習指導で克服できることを知った白井さんは「みんなが義足で走れる場を作ろう」と決意。東京都北区にある東京都障害者総合スポーツセンター

の陸上トラックを借りて、月1回義足ランナーの練習会を開くことにしました。1991年のことでした。はじめはわずか4人での船出でしたが、回を重ねるごとに参加者は10人、20人と増えていきました。

**本人の自信だけでなく
家族も明るく前向きに**

スタートラインTokyoの練習会には、男女を問わず、小中学生から大人まで幅広い年代の人たちが毎回60人ほど全国から参加しています。義足で走れるレベルもさまざまで、練習会で初めてスポーツ用義足を履く参加者もいれば、すでに障がい者の競技会などに出ている上級者、さらにはパラリンピックに出場するようなトップアスリートも、同じトラックで一緒に練習しています。



楽しい雰囲気の中で、子どもたちに走り方を指導する選手会長の水谷さん

スポーツ用義足と出会い 皆で走る陸上クラブ設立へ

「足を失った人にこそ、自分の体で風を切る喜びを感じてほしい!」そんな熱い想いで義足ランナーのための陸上クラブ「スタートラインTokyo」が設立されたのは1991年。以来、約30年にわたり休むことなく月1回の練習会を続け、全国から集まる参加者の心と体に寄り添ってきました。

に勤務する義肢装具士の白井さんが、新婚旅行先のハワイでスポーツ用義足に出会い衝撃を受けたこと。

当時、義足でスポーツをするなど日本では考えられず、「これを履けば野球やジョギングができるんだ」という説明を聞いて、すっかり魅了されたのです。帰国後、義足で全力疾走する外国人女性のビデオを見た白井さんは、「義足ユーザーが思い切りスポーツに挑戦できたら、人生がどれだけ豊かになるだろう」とさらに夢がふくらみスポーツ用義足づく



練習会でスポーツ用義足を装着する白井さん。会員から篤い信頼が寄せられている

くりが自らの目標となりました。それから数年後、それまで日本になかった軽くて丈夫なカーボンファイバーの部材がやっと入って

30年の長きにわたり 月1回の練習会を継続

トも、同じトラックで一緒に練習しています。

骨の病気のため生後9カ月で右足を切断し、小学3年生のときから練習会に参加している中学生の男

の子がいます。他の子と同じように走ったり、サッカーをしたりできず悔しい想いをしていた男の子はここでスポーツ用義足と出会い、できることが一つ増えるたびに自信がついて、「将来はアスリートを目指したい」と明るく元気になることができました。



2019年度 シチズン・オブ・ザ・イヤー表彰式

今年で第30回となる「2019年度 シチズン・オブ・ザ・イヤー」の表彰式は、3組の受賞者の皆さんをお迎えし、2020年1月30日(木)、東京・丸の内のパレスホテル東京で開催されました。当日の様子をダイジェストでご紹介します。

受賞者の活動に改めて感動

表彰式は、受賞者、関係者のほか、選考委員を務めた主要新聞の社会部長や有識者の方々、シチズングループ各社の社員が列席し、華やかな中にも格式のある落ち着いた雰囲気が始まりました。

冒頭、主催者としてシチズン時計の佐藤社長があいさつに立ち、賞の意義や受賞者へのお祝いの言葉、選考委員への謝辞などを述べました。続いて3組の受賞者の皆さんの活動内容をまとめた映像が紹介されました。

紹介映像では、「尻別川の未来を考えるオビラメの会」の皆さんが、大きなイトウを3人がかりで人工採卵の様子や、コミニティナースの矢田明子さんが奮闘する姿、明るい笑顔が並ぶ「スタートラインTokyo」の練習会などが映し出され、会場を埋めた参加者は熱心に見入っていました。



最初はバランスを取るのが難しいスポーツ用義足も、先輩たちの指導で次第に上達

スタートラインTokyoの練習

在約220人が登録。練習会は無償で使用できる施設を利用するため参加費は不要。また、スポーツ用義足は公的な補助がないため数十万円

と高額なのですが、鉄道弘済会が貸し出しを行うなど、誰もが参加しやすい配慮がなされています。

初心者には先輩たちが楽しい雰囲気の中で走り方を指導しており、「初めて参加したころは自信がなく言葉少なだった方が、いつの間にか新人に走り方を指導したり励ましたりしているのを見るとうれしくて、クラブの存在意義を感じます」と、臼井さんからは笑みがこぼれます。また練習会では、義肢装具士や理学療法士、スポーツトレーナーなど、専門家がボランティアでアドバイスをしてくれ

最近、同じように義足の練習会を開く動きが全国に広がっておりありますが、障がい者が集う場はまだまだまだ多くありません。スポーツ参加を突破口に障がいを克服するメンバーを一人でも増やすため、スタートラインTokyoの取り組みはこれからも続きます。

13歳のとき病気で右足を太ももから切断した女性が、トライアスロンに挑戦したいと練習会に参加して、18年ぶりに走ったケースもあります。その後、努力を重ねて「人としてもアスリートとしても成長できている」というその女性は、世界レベルの選手になつています。

一方、遠く秋田県から、「走りた」との想いで通い続けていた女性が、練習を積んでようやく走るこ

とができるようになったところ腫瘍が悪化して亡くなるという、悲しい出来事もありました。「これまでに、そうした辛い思い出も何度かあります。それでも、この活動に参加することが免疫力を高め、『生死』の境界線を『生』の側に広げているのだと確信しています」と臼井さんは前を見つめます。

会に参加し、走ることもができるようになることは大きな自信につながり、本人だけでなく、家族も明るく前向きになれるといいます。近年は、もっと走りたいという人たちのために夜間に週1回の練習会も開催しています。選手会長としてクラブの運営に力を注いでいる水谷憲勝さんは、「頑張ったら頑張った分、自分に返ってきますよー」とエールを送ります。



会員の中にはパラリンピックや国際大会で活躍するトップアスリートも



仲間が集い、語る 楽しいコミュニティに

ることに加え、義足ユーザー同士の情報交換や相談ができるコミュニティにもなっています。

近年はスタートラインTokyoに参加したことが、新たな人生に踏み出すきっかけになり、イラストレーターなどスポーツ以外の分野で才能を開花させている人もいます。2015年には、義足は隠すものというイメージを変え、かわい

義足のイメージを変え 活躍の場も広げる

スタートラインTokyoは会費は不要で、SNSグループに登録することで会員になることができ、現

女性メンバーが中心となって義足のファッションショーも開催(撮影:越智貴雄氏)



年齢も走りのレベルもさまざまな参加者が、楽しく一緒に練習できるのがスタートラインTokyoだ

Message

シチズン・オブ・ザ・イヤー
選考委員長
山根 基世さん



心温まる活動をこれからも

今年も皆さんの活動を拝見し、日本は志の高い市民の活動によって支えられていると実感しました。

「尻別川の未来を考えるオピラメの会」は、本当はイトウを釣りたい人たちがイトウを守っています。それはまるで、オオカミとヤギに友情が芽生えた「あらしのよるに」という童話のようで、私は心温まるメルヘンを読むような気持ちになりました。

矢田明子さんが実践しているコミュニティナースは、できる人ができる場所で、それぞれができることに取り組んでいます。これこそ、少子高齢化の中で、公的な仕組みからこぼれ落ちてしまう人をも支えていく活動だと思いました。

「スタートラインTokyo」が30年にわたって続けてきた義足で走る練習会は、社会の偏見を変えることにも貢献してきました。多様性を大切に、一人一人の個性を尊重して支援する活動は、これからますます重要になっていくと思います。

このように、毎回、精一杯頑張る人に会えるこの賞は、さし上げる私たちが温かい想いに包まれます。これからも、そんな皆さんの活動を心から応援していきたいです。

山根基世(やまね・もとよ) NHKアナウンサーとして数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンス室長に就任。NHK退職後、子どもの言葉を育てる活動に取り組んでいる



- 1 受賞のスピーチを行うオピラメの会事務局長の川村洋司さん
- 2 スタートラインTokyo代表の臼井二美男さん
- 3 大勢の参加者が集う中、表彰式が行われました
- 4 矢田明子さんの代理で出席した中澤ちひろさん
- 5 ビデオメッセージで受賞の喜びを語る矢田明子さん
- 6 シチズン時計佐藤社長による受賞者への賞状及び副賞の授与
- 7 講評を行う選考委員長の山根基世さん
- 8 主催者あいさつを行う佐藤社長
- 9 選考委員を務めた主要新聞の社会部長と有識者の皆さん
- 10 シチズングループ各社の社員も数多く参加
- 11 スタートラインTokyoは当日参加のメンバー全員で喜びを表現
- 12 会場には過去30回の歴代受賞者紹介のパネルを展示
- 13 スタートラインTokyoの活動紹介
- 14 矢田明子さんの活動紹介
- 15 オピラメの会の活動紹介
- 16 17 18 受賞者と交流する選考委員やシチズングループ社員



表彰式後は受賞パーティーに移り、シチズングループの社員らが受賞者の皆さんに話を伺い感動を共有するなど、参加者にとって今後の自己にさまざまな形で生かせる意義深い表彰式となりました。

表彰式後は受賞パーティーに移り、シチズングループの社員らが受賞者の皆さんに話を伺い感動を共有するなど、参加者にとって今後の自己にさまざまな形で生かせる意義深い表彰式となりました。



参加者が感動を共有

受賞者の皆さんへの表彰状の授与に続き、山根基世選考委員長が講評を述べ、これを受け受賞者の皆さんがスピーチを行いました。



CITIZEN OF THE YEAR

1990-2019 受賞者の皆さん

1990年に創設され、これまで30回にわたり、市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。1990~2019年度の受賞者の皆さんの素晴らしい活動をご紹介します。

2019年度

尻別川の未来を考える オビラメの会
絶滅の危機に瀕している尻別イトウの保護を、20年以上にわたって継続する

矢田 明子さん
地域の中に入って住民の健康を見守るコミュニティナースの普及と育成に尽力する

スタートラインTokyo
義足の人になる喜びを知ってもらおうと、30年にわたって練習会を開いている

2016年度

NPO法人 就労ネットうじみくすはあつ
野球ボールの再生を通して、地域との交流や障がい者の就労支援に貢献

塗魂ペインターズ
国内外を問わず駆けつけ、無償で塗装ボランティアを行う

堀内 佳美さん
読書が身近でないタイで、読み聞かせや幼児教育に献身

2018年度

NPO法人 「飛んでけ!車いす」の会
ボランティアの旅行者を募り、80カ国以上に車いすを届けて20年

濱田 龍郎さん
被災地や福祉施設を訪ね、10万杯を超えるラーメンで心も体も温める

NPO法人 全国不登校新聞社
不登校の子もたちゃ親に寄り添い、当事者視点で情報発信を続ける

2015年度

NPO法人 JHDAC
病気などで頭髪の悩みを抱える子どもたちにウィッグを無償で提供

山崎 充哲さん
多摩川の生態系を守るため外来魚を預かる「おさかなポスト」を運用

白石 祥和さん
不登校や引きこもりの若者たちに寄り添い、自立や就労支援に取り組む

2017年度

清水 辰吉さん
地元小学校の新入生に55年以上の間欠かさず入学記念の苗木を贈り続ける

グリスティール・パリージョシアさん
障がいのある外国人旅行者に役立つ日本観光情報サイトを制作・運営

角居 勝彦さん
引退した競走馬の命を守り、幅広い分野でセカンドキャリアを支援

2014年度

原田 燎太郎さん
過酷な生活を余儀なくされている中国の元ハンセン病患者を支援して10年

本間 錦一さん
水難救助隊長として40年、海の安全を見守る87歳の現役ライフセーバー

阪井 ひとみさん
社会的支援が必要な人たちが地域で暮らし自立できるよう、入居支援を続ける

高山 良二さん
特別賞
地元住民たちと共に、カンボジアで地雷処理と復興支援を続ける元自衛官

2013年度

TOY工房どんぐり
障がい児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年

チャイルズエンジェル
子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈

上中別府 チエさん
高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む

2009年度

吉島 美樹子さん
がん治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている

多良良 泉己さん
リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている

茂 幸雄さん
福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う

2012年度

吉村 隆樹さん
障がい者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供

渡辺 玉枝さん
自然体の生き方で、2度のエレレスト女性最高齢登頂記録を達成

ルダシングワ 真美さん
紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身

2008年度

伊藤 和也さん(故人)
戦禍のアフガニスタンで緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる

川崎個人タクシー協同組合
協同障がい施設の子もたちと行く「タクシードライブ遠足」を30年間継続

出水市立荘中学校
ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀

2011年度

税所 篤快さん
バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む

竹内 龍幸さん
盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける

笹原 留似子さん
東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2007年度

西谷 勲さん
中学の夜間学級に50年間仕送りをつけ、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る

車内清掃を続ける 高校生有志
JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い

谷垣 雄三さん
西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる

2010年度

吉田 守松さん
半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける

吉岡 諒人さん
夏休みの観察・実験を通じ、「アリジゴクは排泄しない」という通説を覆す

樋口 強さん
がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年

2006年度

川越 恒豊さん
刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける

桑山 利子さん
スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす

有城 覚さん
交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園

2005年度

堀田 健一さん
障がい者一人ひとりのニーズに合わせた自転車を手作りで26年間作り続ける

吉野 健治郎・勝親子
親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける

日本スピンドル製造株式会社 社員一同
JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施

2004年度

新宮山彦ぐるーぷ
20年にわたり大峯奥駈道(熊野古道)の南半分約45キロの整備を続ける

兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部有志
水没していく観光バスの上で励ましあいながら全員が無事生還

永井 利夫・サヨコご夫妻
子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた

2003年度

高松 由美子さん
長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援

遠藤 マルシアアケミさん
お弁当の配達縁で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校

曾我 健太さん
ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘

2002年度

谷村 基さん
励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける

武井 弥生さん
東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続

アフガニスタン義肢装具支援の会
アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈

2001年度

伊藤 明彦さん
全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録

大島 誠人さん
自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見

菅谷 昭さん
チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事

2000年度

近藤 原理・美佐子ご夫妻
障がい者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた

ジュンコアソシエーション
ベトナムの子もたちの教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続

福祉工房あいち
障がい者一人ひとりの障害者に合わせて、補助器具を考案し、製作

1999年度

セイヤー・ミドリさん
と那嶺 政江さん
在日米軍の父と地元女性の間生まれた子どものために、学校を開設

トーマス・カンサさん
修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台

録音グループ「声」の皆さん
視覚障がい者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年

1998年度

岸本 康弘さん
ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む

金子 聡美さん
安田 志津さん
ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車日本列島を縦断

「福祉ネットワーク 池袋本町」の皆さん
電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る

1997年度

葛木 みどりさん
南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現

高澤 圭介・ナミ子ご夫妻
私財を投じてお年寄りや障がい者が気軽に立ち寄れる家を完成

愛知県立東山工業高等学校 車いす部
高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1996年度

小山 道夫さん
ベトナムの子もたちのため、職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設

福岡 明夫さん
自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録

古川 ヨシさん
障がい者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師

1995年度

川田 龍平さん
命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身

木村 三男さん
濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出

神戸商船大学「白鷗寮」自治会
阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出動

1994年度

星野 勇・シズエご夫妻
足の不自由な方のために1,000足を越える靴を無償で修理・改良

山下 秀治さん
知的障がい者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築

森本 春子さん
山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける

1993年度

宇佐美 松恵さん
1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る

佐藤 昭夫さん
パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年

8/6 竜ヶ水駅 災害救助活動グループ
土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助

1992年度

清水 ルイーズさん
日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている

千川 文次さん
絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元

「雄冬新聞」 歴代編集長
地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー

1991年度

チヨン・キューキョンさん
長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ

馬場 国敏さん
湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地で活動

十円会
月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献

1990年度

加藤 幸男さん
バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助

鈴木 陽子さん
過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動

林 鎌友さん
使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付

CITIZEN



尻別川の未来を考える オビラメの会

絶滅の危機に瀕している
尻別イトウの保護活動を
20年にわたり継続



矢田 明子さん

まちを元気にする
コミュニティナースとしての
活動の普及と育成に尽力



スタートラインTokyo

約30年にわたり、
義足で走ることをサポートし
走る喜びを伝える

シチズン時計株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12
TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280
<https://www.citizen.co.jp/coy/index.html>